

雑 報

1988年中に近日点を通過した彗星のローマ数字記号

(本誌 1989年3月号 74頁に続く)

1988年中に近日点を通過した彗星は下表のように 24

個である (MPC 15439). SMM 3 から SMM 7 までの 5 彗星は、太陽をかすめるクロイツ群に属し、Solar Maximum Mission 衛星により近日点通過の際に発見されたものである。尚、*印は m_2 と呼ばれる核光度である。

(香西洋樹)

記号	仮符号	名前	近日点通過 (U.T.)	発見・検出者	発見日	光度
1988 I	1987 d1	Ichimura	1988 Jan. 10.1	市村義美	1987 Nov. 22	9
II	1987 g1	Jensen-Shoemaker	Jan. 18.8	{P. Jensen Shoemaker 夫妻	1987 Nov. 24	17
III	1988 g	Shoemaker-Holt	Feb. 14.2	{Shoemaker 夫妻 H. Holt	1988 May 13	11
IV	1987 f1	Furuyama	Mar. 3.1	古山 茂	1987 Nov. 23	12
V	1988 a	Liller	Mar. 31.1	W. Liller	1988 Jan. 11	13
VI	1987 r	P/Reinmuth 1	May 10.1	{T. Gehrels J. V. Scotti	1987 Jul. 22	19.6
VII	1987 z	P/Shoemaker-Holt 1	May 21.4	{Shoemaker 夫妻 H. Holt	1987 Oct. 18	14.5
VIII	1988 o	P/Ge-Wang	May 23.8	{Y.-I. Ge Q. Wang	1988 Nov. 4	16
IX	1988 f	P/Finlay	Jun. 6.1	{A. C. Gilmor P. M. Kilmartin	1988 Apr. 21	17*
X	1988 l	(SMM-3)	Jun. 27.8	O. C. St. Cyr	1988 Jun. 27	≈ -1
XI	1989 j	P/Shoemaker-Holt 1	Aug. 7.4	{Shoemaker 夫妻 H. Holt	1989 Mar. 9	13
XII	1988 m	(SMM-4)	Aug. 21.8	{D. Kobe C. Waugh	1988 Aug. 21	≈ -3
XIII	1989 b	P/Helin-Roman-Crockett	Sep. 10.2	{E. Helin R. Helin B. Roman R. Crockett	1989 Jan. 2	15.5
XIV	1987 g	P/Tempel 2	Sep. 16.7	{T. Gehrels J. V. Scotti	1987 Jan. 29	20.4
XV	1988 j	Machholz	Sep. 17.6	{D. E. Machholz 高見沢, 寺迫, (谷中, 入江, 藤川	1988 Aug. 6 1988 Aug. 8	8.4 9~9.5s
XVI	1989 k	P/West-Hartley	Oct. 6.3	{R. M. West M. Hartley	1989 Mar. 14 1989 Mar. 28	17.5 17.0
XVII	1988 n	(SMM-5)	Oct. 12.1	O. C. St. Cyr	1988 Oct. 11	≈ -4
XVIII	1987 c1	P/Longmore	Oct. 12.2	{J. Scotti J. Gibson	1986 Dec. 29 1987 Nov. 3	20.5 19.5
XIX	1988 q	(SMM-7)	Oct. 24.9	A. L. Stanger	1988 Oct. 24	≈ -4
XX	1989 a	Yanaka	Oct. 31.8	谷中哲雄	1989 Jan. 1	11
XXI	1989 f	Shoemaker	Nov. 2.1	Shoemaker 夫妻	1989 Jan. 11	16
XXII	1988 p	(SMM-6)	Nov. 18.4	O. C. St. Cyr	1988 Nov. 18	1
XXIII	1989 c	P/Bradfield	Dec. 5.2	A. C. Bradfield	1989 Jan. 6	12
XXIV	1988 r	Yanaka	Dec. 11.7	谷中哲雄	1988 Dec. 29	9

IAU コロキウム No. 124
 “二重銀河と相互作用銀河” 出席報告

1989年12月4日から7日までの4日間、アメリカ合衆国アラバマ州テツカルッサのアラバマ大学で IAU コロキウム“二重銀河と相互作用銀河”(Paired and Interacting Galaxies) が開催された。日本人としては、私の他に、京都産業大学の原 哲也氏、イギリスの University of Wales (Cardiff) にいる野口正史氏が出席し、それぞれが講演を行った。

全世界から 150 名余りの銀河関係の研究者が出席した。今回の研究会で内容と余り関係のないことであるが、印象に残ったことが一つある。それは、1989年という世界史に残る年を象徴する出来事である。

会議が始まる前日の 12月3日の早朝、私が時差ボケでもうろうとしつつ、モートルのテレビをつけ、チャンネルを CNN にするとマルタ島で行われたアメリカのブッシュ大統領とソビエトとゴルバチョフ書記長の歴史的会議後の記者会見の生中継であった。その後夕刻に出席受付のために会場に行き、主催者の話を聞く今回の研究会には、ソビエトから 20 名余りもの多くの出席者があるということであった。やはり天文学の世界にも東西緊張緩和の政治の流れの一端が現れるのかと、妙に感動してしまった。実際、ソビエトから来た人と話をすると「ベレストロイカのおかげで来られた。」という人もいてなるほどと思った。また、「ソビエトと日本は隣同士なのだから、一緒に銀河の国際研究会を開こう。日本は物価が高いそうだから、ソビエトの客船を使って、日本海で開こう。」等という提案(冗談?)までされてしまった。

研究会は、名前の通り銀河の相互作用や銀河のペアー、グループ等を中心に研究発表及び議論が行われた。私は、初日に銀河の形態相関と双子銀河について発表した。二重銀河の形態その他の性質は、似ていることが多いということは以前から指摘されていたが、それは、二重銀河に限らずに最近距離の銀河をとってもその傾向(Morphology Correlation)があることを定量的に示し、Morphology-Density Relation を一歩進めたものであることを示した。また、これとの関連で、双子銀河という新しい概念を提唱した。これに対して、様々な質問や議論があり、国内の研究会とは違う層の厚さを実感した。この私の発表と関連して、Hickson group の Morphology-Density Relation に関する発表がいくつかあった。それは、これらのグループでは通常言われている Morphology-Density Relation と同じような関係がみられるのであるが、通常のものからシフトしているというのである。Morphology-Density Relation は定量的には Dressler

(1980) が最初で、その後 Postman and Geller (1984) その他の研究で確固としたものになっていると思っていたのであるが、今回聞いた限りでは我々の Morphology Correlation と一緒に再び銀河天文学の分野で多少の話題になりそうな気がした。

野口氏は銀河の相互作用の時の形態の変化と Star Formation の変化のシミュレーションの結果をきれいなビデオ映像を使って示し、絶賛を得ていた。

今回の研究会の特徴として、二つのテーマについてパネルディスカッション形式で議論が行われたことがあげられる。一つは、一日目の午後に Interaction と Merging の定義について Burbidge の司会で行われた。二日目の午後には、Roberts の司会で現在真偽のほどが問題になっている Redshift Quantization についてその中心人物である Tift を呼んで行われた。Redshift Quantization というのは二重銀河の Radial velocity の差を調べると 72 km/s という周期で量子化しているというもので、Tift が 1980 年頃から言い出していることである。これに対してはその解釈の困難さも手伝って、当然のことながら Selection Effect で現実のものではないという意見がかなり強い。今回は賛成派、反対派で活発な議論が展開された。最後に Norman の提案で、発言者は賛成反対を明確に収録に記して、責任を明確にしておこうという提案がなされて、議論を終えることととなった。

今回の研究会に出席して、特に感じたことは、日本国内で行われる研究会との違いである。まず、狭い分野の研究会であるから当然かもしれないが、質問や議論が国内で行われるものよりもかなり適切で、参考になることが多いということである。また、表面的なことであるが、ネクタイに背広という国内の学会でみられるような人が余りいないということである。要するに、ストイックに研究発表を行うというのではなく、研究会を楽しみにきているという雰囲気である。従って、参加者が講演を聞くにしても批判的な見方も当然のことながらするが、内容的におもしろそうなどところを見つけようとする姿勢であるような気がする。

最後に今回の研究会に私が出席するに当たり、井上科学振興財団から旅費の援助をいただいたことを報告し、感謝の意を表したいと思います。(山縣朋彦)

☆ ☆

☆ ☆ ☆